

国際協力海外レポート

馬場 金司（ばば きんじ）【JICA シニア海外ボランティア】

赴任地：ガーナ共和国 セントラル州ケープ・コースト市

職種：統計

赴任期間：2014年3月～2016年3月（予定）



○ガーナとアフリカのこと

ガーナに来て半年になりました。JICA のシニアボランティアとして、現在ケープ・コーストというところに住んでいます。アフリカと言うと、サバンナや野生動物を思い浮かべる人が多いと思いますが、アフリカはサハラ砂漠で南北に区切られていて、北側の地域は地中海文化なので、みなさんがイメージするようなアフリカではありません。南側（サブサハラ）の地域で、所謂サファリで知られているところは東アフリカです。ガーナは西アフリカにあり、西アフリカは仮面や彫刻などのプリミティブ・アートで知られていて、ヨーロッパと古くから関係があります。日本からは飛行機で約 20 時間もかかり、大変遠くに来たと実感しました。

西アフリカは、大航海時代に水や食料の中継基地となり、産業革命時にはその資源が注目され、奥地にヨーロッパ人が進出しました。その際、ヨーロッパの国々の利権を調整するための話し合いが行われ、領域国民国家として今の国々に分割されました。そのため、ガーナの公用語は英語ですが、コートジボワールなど周囲の国々はフランス語が公用語となっています。

滞在しているケープ・コーストは、南部の海岸沿いに位置しており、ガーナでは数少ない観光地の一つです。「ケープ・コースト城」と近くの「エルミナ城」は、古くは貿易基地や要塞として使われた建物ですが、その後の奴隷貿易の基地としても使われ、現在は世界文化遺産に登録されています。

「ケープ・コースト城」



門を入ったところ



正面



大西洋側から

また、人類はアフリカで生まれ、ごくわずかの人たちがアフリカを出て、太平洋、アジア、ヨーロッパに広がったと考えられています。

先入観かも知れませんが、体型や顔立ちは様々です。言語や習慣も様々ですが、それは日本の方言のような違いではありません。様々な民族が入り乱れて暮らしていた場所を、ヨーロッパ人が国境を作って分けしたからです。しかし、現在は独立運動を通して、国民意識が形成されています。

○気候と自然

ガーナは赤道のすぐ北に位置しているため、当たり前ですがとにかく暑い。ただ、7月から9月頃までは雨季で、風も南からの風となり、日本の夏よりも過ごしやすくなります。気温は25度から30度少しで、湿度は80%近く（昼は60%台になる）です。

雨季の前期は、雨が降り出したら、少ししてすさまじいスコールになります。傘は全く役に立ちませんが、1~2時間で止むので雨宿りして待つのが一番です。中心地のコトクラバというところに乗り合いタクシーで買い物に行った時に、スコールになってしまい、どうしようかと思いましたが、10人くらいが雨宿りしている場所にタクシーを止めてくれたので、窮屈なところでスコールが止むまで1時間ほど待ちました。今もまだ雨季ですが、スコールは降らなくなってきました。これから12月、1月と北からの風が変わって、乾期で大変暑くなるそうです。

また、赤道に近いので、朝夕の6時ごろ急に明るくなり、そしてまた暗くなります。日本のように黄昏時がありません。この地域はもともと熱帯雨林でしたが、今ではその面影は全くありません。近くの国立公園ではその名残を見ることができるのですが…。ただし、野生動物はいません。北部に行けば象やワニを見ることができる保護区があります。身近にいるのは、頭がオレンジ色をした20~30cmの大型のトカゲぐらいです。草花がほとんどないためか、花をつける、特にマメ科の木が多く植えられています。花は好きなので、たいていのところに造花が飾ってあります。

鳥も蝶なども色は地味で、形も日本のものより小型のものが多く、想像とは逆でした。また、カラスはどこでも真黒と思っていたのですが、こちらにいるのは、胸と首が白い「ムナジロガラス」です。初めて知りました。一度、真っ赤な小鳥を見つけた時は感激しました。枝にぶら下がったボール状の巣を作る「ウィーバー」という小鳥です。

○言語のこと

ガーナの現地語は74あるとのことですが、そのうち有力な11言語と英語で初等教育をしているようです。

「チュイ語」という現地語を習ったのですが、ケープ・コーストでは「ファンティ語」が使われています。学校の部屋を掃除してくれるアンナさんなど数人が、私を見かけるとファンティの教育をしてくれます。文字はアルファベットを使って発音を表しているのですが、書けない人も少なくないようです。したがって、音だけで、それもフレーズだけで、文法については何も教えてくれないので、応用もできず、いつまでたっても理解できません。しかし、買い物の時など、現地語であいさつをすると、それまで硬い表情だった人の顔がいつぱんににこやかになり、うれしそうに対応してくれます。

授業でよく使う言葉は「ボコー？(OK?)」です。「ボコー」と応えてくれます。また、「確率20%」と言うときの「20」をチュイ語で言ったことがあります。10(エデュ)に2(ミエンニュ)の語尾を付け、「エデュニュ」と言うのですが、言葉がすぐに出ず少し考えて言ったため、間違えたと思って「twenty」と訂正しました。しかし、現地語と気が付いた生徒もいて、拍手をくれたので、それに気をよくして、他の教室でも試してみましたが無視されました。

滞在しているケープ・コースト大学などでの高等教育は全て英語で授業をします。もちろん教科書や

「コトクラバ」



ケープ・コーストの中心部で、マーケットの近くの風景。平日は車と人で歩くにも不自由します。この日は休日。

資料は全て英語です。日本でも英語教育の必要性が言われ、日常の会話が念頭にあるようですが、公用語として使うこととはかなり距離があるように感じます。

手続きやレポートなどの文書も英語だけなので、英語での作文能力が必要です。そのため、日常会話ではあまり使われない単語も使うので語彙が豊富です。会話などの簡単な文章は、みんなとても早口で話すので、もともと英語能力の低い私は大変苦勞します。1対1で話していても、容赦なく早口で話してきます。英語がネイティブな人は、発音の聴きとり許容範囲が広いので問題ないのですが、こちらは苦勞しますし、相手もこちらの発音に苦勞しています。特に学生など、外国人と接した経験のない人の英語には非常に苦勞します。

また、読む能力も必要です。プレゼンテーションの際、文章を読んでいる途中で次のスライドになってしまったりします。以前一緒に仕事をしていた英国人に、「漢字は読まなくても見れば分かる」と言ったところ、彼に、「英語は読まなくても見れば分かる」と言われましたが、そのようになりたいものです。

○インフラ

ガーナで何に一番驚くのかは、年代によってかなり違います。若い人が一番驚くのは、立ち小便（女性も）です（出前授業のベテランによると、小学生に最も受ける題材だそう）。これは、トイレ（ガーナでは人に「トイレ」と言うのは無作法で、「ウォッシュ・ルーム」と言う）が少なく、草むらなどの用を足せる場所が他にたくさんあるためです。しかし、私が子供のころは普通のことで、東京オリンピックの時に、立ち小便をしないようにとのキャンペーンがあったのを記憶しています。塀などに鳥居のマークを良く見ました。また、人前での授乳にも若い人は驚くようですが、我々の世代では普通でした。

下水やごみ処理の施設はありませんが、電気はどこでも使えます。世界一の人造湖で水力発電をしています。ただし、発電量には余裕がないようで、また、経済発展で電力需要が増加しているせいもあり、毎日のように停電があります。さらに最近では、発電設備が故障したらしく、ずっと計画停電が続いています。3グループに分けているので、3日に2日が6時から18時、もしくは18時から6時まで止まります。全国の1/3が停電中ということになります。5、6時間で復旧する時もありますが、12時間も電気が止まると冷蔵庫は単なる白い箱です。インフラはかなり余裕がないと、問題が生じたときの影響が非常に大きなものになります。経済的に余裕のある家庭は発電機を持っており停電の影響は小さいですが、ほとんどの家庭では無理です。それにしても、1カ月以上先までの停電予定表（そこで終わりとは書いていない）を見ると暗澹たる気持ちになります。特に、懐中電灯の明りで炊事をし、食事し、入浴（バスタブはありますがシャワーだけ）していると情けない気持ちになります。学校で若い人に「日本での停電の頻度はどのくらいと思うか？」と聞くと、「1週間に1回」という回答でした。停電になると家の中は真っ暗なので、外に出ることがありますが、ホタルと思える小さな光をよく見ます。星は200個ぐらいが一等星の明るさで見えます。天の川は分かりませんでした。北斗七星を見つけた時は感激しました。

ガスもプロパンなのでどこでも使えます。ただし、こちらではボンベをガソリンスタンドなどに持って行って入れてもらいます。頭にたくさんの枯れ枝を乗せている人をよく見かけるので、薪を使っている人も多いと思います。

停電よりも大きな問題は「水」です。水道がない（不思議に蛇口はあるそうですが…）町も普通にあります。ケープ・コーストの中心地でも、共同の水道に子供たちがバケツを持ってきて、水を入れて家に運んでいるのをよく見ます。水道のない町では、「ピュア・ウォーター」という牛乳のテトラパックのようなビニール袋の水を買う必要があります。袋二つで風呂（洗髪も）を済ますという、豪快な若い JICA の女性隊員もいますが…。

今住んでいる住居には水道があるので、支給されている浄水器を使って炊事などをしていますが、方々には巨大なポリタンクがあり、それで調整しています。キッチンに腰ぐらいの高さの大きなポリバケツ

があった（じゃまなのでベランダに移した）のですが、どうも乾期になると長期断水になるようです。以前ホーム・ステイしていた家でも毎日のように断水があり、バケツの水の使い方がよく分からないので、トイレやバスをいつ使えるのか心配していました。学校では職員用トイレの鍵を渡されたのですが、手洗いの水道が出たことはめったにありません。いつも大きなポリバケツに水が入っています。

○交通

ガーナの主な交通手段は自動車です。鉄道は、首都アクラでは1日4往復程度の運転なので、線路を歩いても列車がくる恐れが全くないため、近道として利用していました。自動車専用道に近いものもアクラにはありますが、ほとんどは生活道路と兼用しています。アクラはいつも大渋滞で、市の中心部に行くには1時間を覚悟する必要があります。また、車優先社会のため、すごいスピードで走るの、方方で道路をかまぼこ状にして徐行させています。ケープ・コーストとアクラを結ぶ幹線道路（有料）も片側1車線だけです。しかも、途中にたくさんの町があるので、道路の凸凹もたくさんあります。



幹線道路の途中には多くの街があり、マーケットがある。車を徐行させるために、このような集落では道路をかまぼこ状にしている。



ケープ・コーストからアクラに移動中に撮った写真

市民の足は「トロトロ」という乗合バスで、大変安価です。距離があってもせいぜい2セディ（1セディ＝約30円）で、大抵は1セディ前後で済みます。タクシーは乗合のルートタクシーがあり、4人の乗客が集まったら出発します。長距離は大型バスもありますが、15人集まったら出発するというタイプの小型の車が多いです。ケープ・コースト～アクラ間で14～19セディ（エアコン完備のフォードの新しい車は高い）で便利です。ただ、車での長距離移動は、トイレがないので朝から水分を控えます。一度、何も関係のないところで車が止まったので、故障かと思ったら運転手が用を足していました。故障で代わりの車を2、3時間待つ場合もあるので、その時は覚悟しましたが…。

また、1車線なので後続車が次々と追い越して行くのですが、リスクはとらず、必ず対向車が確認できる場合しか追い越しはしません。しかし、一度道路端に牛がいたことがあり、運転手がクラクションを鳴らすと、牛は驚いて道路の中央に移動しました。運転手は慌ててハンドルを切ったのですが、ちょうど対向車もそこに近づいていました。間一髪で車2台と牛がすれ違うことができ、その時は車内の全員が後ろを振り返り安堵の声をあげました。

ケープ・コーストからアクラまでは3時間足らず、中部の古い都市クマシ（古い大きな町で、昔の王国の首都）まで4時間です。田舎町の人々は幹線道路に入るのにも時間がかかり、直通バスがないため近距離のトロトロを乗り継ぐ必要があり、移動は大変です。（続）